

Klaus Döring und Theodor Ebert (hrsg.):  
*Dialektiker und Stoiker, Zur Logik der Stoa und  
ihrer Vorläufer,*

Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1993, S. 361.

水 落 健 治

昨今のヘレニズム哲学、とりわけストア論理学の研究の進展にはめざましいものがある。K. Döring, A. Graeser, K. Hülser らによるメガラ派、テオフラストス、ストア派の新たな断片集の公刊を契機に始まったこれらヘレニズム諸学派の集中的研究の熱気は、D. N. Sedley, K. Döring, Th. Ebert らによる「弁証学派」*dialektikoi* の存在をめぐる一連の議論によって、現在その頂点に達した感がある。すなわち、ストア論理学の成立に際しては、これまでその存在が十分確認されて来なかった「弁証学派」と呼ばれる学派が決定的な役割を演じており、ストア論理学は、この学派の論理学を克服することによって初めて成立しえた、というのである（『西洋古典学研究』XLIII, 1995, pp. 152-155 の金山弥平氏による書評を参照）。

本書は、このような昨今の研究状況を踏まえて、1991年9月1～9日ドイツの Banberg で開催された「ストア派とその先駆者たちの論理学についてのシンポジウム」*Symposium zur Logik der Stoiker und ihrer Vorläufer* で行われた発表をまとめた論文集であり、ドイツ、イギリス、イタリアの研究者の論文を18本収録している。

1. W. Ax, Der Einfluß des Peripatos auf die Sprachtheorie der Stoa.
2. M. Baldassarri, Ein kleiner Traktat Plutarchs über stoische Logik.
3. J. Barnes, Meaning, Saying and Thinking.
4. S. Bobzien, Chrysippus' Modal Logic and its Relation to Philo and

Diodorus.

5. W. Cavini, Chrysippus on Speaking Truly and the Liar.
6. T. Ebert, Dialecticians and Stoics on the Classification of Propositions.
7. U. Egli, Neue Elemente im Bild der stoischen Logik.
8. M. Frede, The Stoic Doctrine of the Tenses of the Verb.
9. G. Giannantoni, Die Philosophenschule der Megariker und Aristoteles.
10. K. Hülser, Zur dialektischen und stoischen Einteilung der Fehlschlüsse.
11. K. Ierodiakonou, The Stoic Indemonstrables in the Later Tradition.
12. F. Jürß, Zum Semiotik-Modell der Stoiker und ihrer Vorläufer.
13. M. Mignucci, The Stoic *Themata*.
14. L. Montoneri, Platon, die Ältere Akademie und die stoische Dialektik.
15. L. Repici, The Stoics and the Elenchos.
16. A. Schubert, Die stoischen Vorstellungen.
17. G. Seel, Zur Geschichte und Logik des *θεριζων λόγος*
18. H. Weidemann, Zeit und Wahrheit bei Diodor.

すなわち本書は、a. ストアの言語哲学・論理学に関わる歴史的諸問題を扱う論文 (1, 2, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 14, 17, 18), および、b. ストアの言語哲学・論理学における重要なテーマを哲学的・論理的に扱う論文 (3, 8, 10, 12, 13, 15, 16) という二種類の系統の論文を収録することによって、ストアの言語哲学・論理学の最新の全体像を浮かび上げようとしたもの、ということができるであろう。

これらの中で、まず刺激的なのは、ペリパトス派の論理学とストアの言語哲学との関係を歴史的に扱った 1. である。著者 Ax はまず、Theophrastos のもとで最盛期を迎えた前 4 世紀のペリパトス派と Zenon との接触関係を示す歴史的資料——*Technē peri phōnē* の成立に関する資料、Pergamon, Alexandria の文法学の成立に関する資料等——を掲げて両者の関係が意外に強いものであることを示す。次いで、ペリパトス派の言語理論の性格を示すために、まずアリストテレスの言語理論を『カテゴリー』、『命題論』、『詩学』等のテキストをもとに述べ、アリストテレスの関心が言語や論理そのものによりも言語を媒介とする存在把握に在ったことを示し、この流れが Porphyrios や Simplicios に受け継がれたことを述べる。そして、Theophrastos においては、この「言語に対する存在の優位」というアリストテレスの思想が受け継

がれると共に、「品詞」(mere lexis, partes locutionis) や「言葉の力」(aretei lexis, virtutes locutionis) に関する議論においてもアリストテレスの受容が見られることを示す。これをうけた Stoa の言語理論についての記述では、Stoa における dialektike の位置づけに関する議論を手掛かりに、Stoa における phone-lexis-logos の概念がいかなる仕方でアリストテレス思想を展開したものであるのかが示され、続いて、Stoa の「名詞変化」ptosis の概念や「時制」理論のアリストテレスとの関わりが示される。そして著者は、結論として、ペリパトス派とストアとの影響関係を、(1) 哲学者同士の直接的接触などに起因する直接的影響関係、(2) 使用される用語、扱われる事項の対応などに見られる影響関係、(3) 両者の思想の比較によって浮かび上がる漠然とした影響関係、に区分し、これらを箇条書きにできわめて明瞭にまとめている。

ストア「弁証法」dialektike が、プラトンの弁証法、アリストテレスの弁証法といかに関わるかを論じた 14. も興味深い。ここで著者は、プラトンの dialektike において見出される諸要素——(1) 論駁の技術、(2) 真の實在に至る方法、(3) 認識論との関わり、(4) 論理・言語的側面(分割と総合)、(5) 教育の方法としての側面——を取り上げ、これらが、『パルメニデス』解釈との関連でどのような仕方で古アカデメイアに受け継がれて行ったか、どのような仕方でアリストテレスの範疇論等と融合したか、また Diodoros Kronos 等のメガラ派の人々にどのように受け継がれて行ったかを示す。そして、ストア派が、「蓋然的論証」としてのアリストテレスの dialektike に対立する形でプラトン派の dialektike 概念を受け入れつつも、イデアの存在をめぐる彼らと激しく論争した姿を描き出している。

そして、この「弁証法」が、現実の論争の中でどのように具体的に用いられたのかを示そうとするのが 15. である。ここで著者は、Plutarchus や Cicero といった資料にまで考察範囲を広げて、「論拠を示す」、「矛盾を示す」、「ひっかける」、「沈黙する」、「証人を引き出す」といったストアの論争 elenchos の様々な相を紹介している。

ストアの言語哲学の 2 大資料である Diogenes Laertios と Sextus Empiricus との間の微妙な相違・矛盾を手掛かりに、ストア派とその先駆者たる弁証学派との命題理論の相違と相互関係を明らかにしようとする 6. もまた刺激的である。著者 Ebert は、この弁証学派についてすでに *Dialektiker und frühe Stoiker bei Sextus Empiricus* (1991, Göttingen) という著書を公刊しているが、本論文では、この著書で

扱われていない「命題理論」がこの著書と同様の方法で論じられている。そして、弁証学派とストア派の単純命題・複合命題の区分の相違について精緻な議論を展開し、Chrysippos が弁証学派の命題理論を発展・展開させた背後には、弁証学派で前提されていた「日常言語」を「学的言語」(=ideal formal language) へと高めようとする意図、すなわち「命題論理学」形成の意図 (“The idea of propositional logic as a strictly formal theory” S. 127) が存していたことを結論している。

以上われわれは、ストア派の歴史的諸問題を扱った幾つかの論文の内容を垣間見て来た。この簡単な紹介からだけでも、われわれは、昨今のストア研究の目覚ましい展開の姿を感じ取ることができるであろう。紙面の都合で、ストアの哲学的問題を扱う論文に触れることはできないが、本書で扱われている *lekton* (3), *phantasia* (16), 時制論 (8) 等に関する論文もまた同様の感想をもたらすのに十分である。プラトン・アリストテレスを中心とする古代哲学と中世哲学との間の空白・間隙はいまや埋まりつつあるといえよう。

評者は、特に初期アウグスティヌス研究等との関わりで、本書からきわめて多くを学んだ。vox, sonus, pars orationis, vis verbi といった概念の背景は本書によってかなり見えてくるし、アリストテレスの述語論理とストアの命題論理との間の複雑な関係や相互交渉、あるいは、ラテン世界における *grammatica*, *rhetorica*, *dialectica* の成立についても、本書が教えてくれる所は多い。本書の中にちりばめられた——資料・参考文献なども含めての——「素材」は、われわれが初期中世の姿を広め深めるための大きな手掛かりとなると思われる。

けれども、このことは、本書に不満がないということではない。本書の、哲学的論文の中には、記号論理学の書式を用いてストアの論理学の構造を論じているものも多いが、彼らの論理学が「存在・実在」とどのように関わっているのか、という点になると、この点に関する記述の少なさに、何となく疑問や不満が残ってしまう。だが、この「論理学と存在論との関わり」の問題こそが、ストア研究のこれからの課題なのかもしれない。

---